研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第2号

石清水型削器小考
桑波田　武志

南九州貝殻文系土器に見られる地域性について
黒川　忠広

田村式土器とその周辺（覚書）
横手　浩二郎

上野原遺跡第10地点における石材選択について
八木澤　一郎

「成川式土器」の器種組成について（予察）
－杯形土器の様相を中心に－
相美　伊久雄

古代官衙の立地
－古代の官衙は，鹿児島ではどのようなところに置かれたか－
繁昌　正幸

鹿児島県における荘園遺跡研究の現状
中村　和美

鹿児島県における古代の鍛冶遺構について
川口　雅之

墨書土器の性格
－鹿児島を例として－
坂本　佳代子・岩澤　和徳・松田　朝由

鹿児島県における中世煮炊具の一様相
上床　真

島津本家における近世大名墓の形成と特質
松田　朝由

溝状遺構の一性格
東　和幸

《実践報告》　出土木製品保存処理の現状と課題
永濵　功治

平成14年度　埋文センター年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2004. 3

『縄文の森から』第２号　　目　次

石清水型削器小考　桑波田武志 …… 1

南九州貝殻文系土器に見られる地域性について　黒川　忠広 …… 11

田村式土器とその周辺（覚書）　横手浩二郎 …… 19

上野原遺跡第10地点における石材選択について　八木澤一郎 …… 23

「成川式土器」の器種組成について（予察）　相美伊久雄 …… 29

古代官衙の立地　繁昌　正幸 …… 37

鹿児島県における荘園遺跡研究の現状　中村　和美 …… 55

鹿児島県における古代の鍛冶遺構について　川口　雅之 …… 63

墨書土器の性格　坂本佳代子・岩澤和徳・松田朝由 …… 71

鹿児島県における中世煮炊具の一様相　上床　　真 …… 81

島津本家における近世大名墓の形成と特質　松田　朝由 …… 91

溝状遺構の一性格　東　　和幸 ……109

《実践報告》出土木製品保存処理の現状と課題　永濱　功治 ……117

平成14年度　年報 ……121

研究紀要

「成川式土器」の器種組成について（予察）

－杯形土器の様相を中心に－

相　美　伊久雄

Assumption about Shape categories Composition of Narikawa- type Potteries

Sagami　Ikuo

要旨

古墳時代中期以降，須恵器出現に伴い器種組成に大きな変化が生じ，杯主体の汎日本的な器種組成が形成される。しかし，南部九州に分布する「成川式土器」にはこのような汎日本的な器種組成への変化は認められない。そこで本論では「成川式土器」の器種組成の変化をより具体的に表わすために，南部九州を７地域に区分し，特に杯の様相に着目して検討を行った。その結果，器種組成の変化に地域差と時期差が存在することや杯の比率に地理的勾配が認められることが分かった。そして南部九州周縁域では杯はある程度存在するが，高杯の比率が高いという独特の様相を示しており，南部九州とそこに隣接する地域の要素とが混在した器種組成を形成していることが考えられた。

キーワード　古墳時代，南部九州，成川式土器，器種組成，杯形土器，地域差

1　はじめに

古墳時代において，弥生時代の地域色の強い土器が斉一的な土器様式である土師器に変化するという「土師器化」が認められるが，南部九州[1]では「土師器化」が顕著ではなく，地域色の強い土器が存在する。それがいわゆる「成川式土器」[2]であり，弥生時代後期後半から古墳時代にかけての様式群の総称である。

「成川式土器」の編年に関する研究は，これまで数名の研究者によって試みられてきた（平田 1980，池畑 1980，多々良 1981，坪根 1986，中村 1987・2002 ほか）。そして現在では中村直子により示された「中津野式→東原式→辻堂原式→笹貫式」という編年案（中村 1987）が最も受け入れられており，編年に関する研究はほぼ落ち着いた状態にある。

ところで古墳時代中期以降になると，須恵器の出現に伴って，器種組成に大きな変化が生じ，器種組成の主体を杯形土器（以下，器種における「～形土器」を省略する）が占めるという汎日本的な器種組成が形成される（西 1982，石野 1984 ほか）。

「成川式土器」の器種組成については主に中村が検討を行っている（中村 1999 ほか）。それによると，「成川式土器」の器種には甕・壺・鉢・高杯・小型丸底壺（坩）・小型器台などがあり（中村 1987・1993），特に弥生時代終末期に小型の鉢の増加と弥生時代にはわずかしか認められなかった高杯の増加・安定という様相が認められ，小型丸底壺や小型器台の存在から土師器の器種を積極的に受け入れていることがうかがえるとしている（中村 1999）。

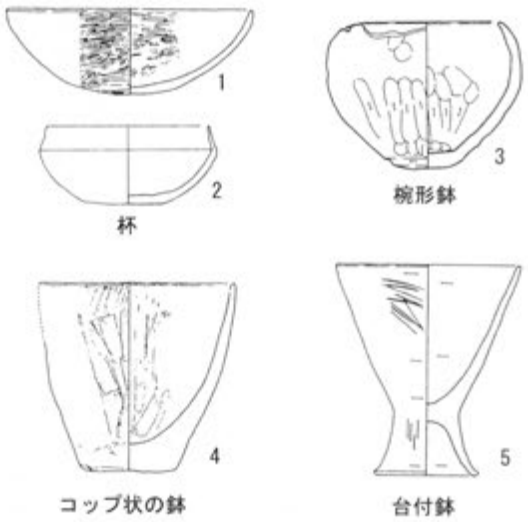
そして，古墳時代中期以降になると杯が出現するが，高杯も多量化するために，杯主体の器種組成には完全に移行しないとしている（中村 2000）。

また地域差に関しては北薩地域と肝属平野において広口甕・丸底甕・それらの折衷甕の存在や杯の存在に，前者は肥後地域に，後者は日向地域にそれぞれ類似性がみられるとし，薩摩半島・鹿児島湾岸部は地域性の強い器種組成がみられるとしている。そして，北薩地域と肝属平野は古墳時代前期から古墳が築造された可能性があり，そのような質的な差異が器種組成の地域色にも反映されたと考えている（中村 2002）。

このように南部九州においては，汎日本的な器種組成への変化は認められない。そこで，本論では「成川式土器」の器種組成の変化をより具体的に表わすことを目的に，南部九州をより細かく地域区分した上で，特に杯の様相に着目して検討を行い，また南部九州と隣接する地域との比較も行う。

なお，本論での杯とは口が開く浅めのものであり，一方鉢とは深めのものを基本とする。中村の分類（中村 2002）と比較すると，杯が鉢Ｇ・Ｉ（杯形鉢）にほぼ相当し，鉢が鉢Ａ・Ｂ・Ｃ（台付鉢），鉢Ｅ・Ｆ（椀形鉢），鉢Ｈ（コップ状の鉢）に相当する（第１図参照）。また，第１図２は口縁部が短く屈曲しており，これは須恵器模

倣杯と考えられ，肝属平野周辺に主に存在するとされている（中村 2000）。



1：永野原　2：花牟礼　3：橋牟礼川
4：東田　5：保養院　※各報告書より引用

第１図　杯形土器と鉢形土器(S=1/6)

2　検討の対象と方法

（１）検討の対象

対象とする時期は南部九州において須恵器が出現する時期以降の「成川式土器」，つまり中村の言う辻堂原式と笹貫式であるが，論の展開上，その前段階つまり中津野式と東原式も含めて考える[3]。

なお，中村は 2002 年に「成川式土器」の再編年を行い，古墳時代中・後期（辻堂原～笹貫期）を４期に細分している。しかし，本論では 1987 年の編年案を用いることとする。その理由は細分された編年を用いると，各時期の分析対象資料が減少または存在しない場合があると考えたからである。

対象とする地域は「成川式土器」が分布する南部九州であるが，地勢的特徴を考慮して，以下の７つの小地域に区分した（第２図）。

１）川内平野周辺　　２）薩摩半島西岸域
３）薩摩半島東岸域　　４）鹿児島湾奥周辺
５）肝属平野周辺　　６）加久藤・小林盆地周辺
７）都城盆地周辺

（２）検討の方法

検討の方法としては，一遺構から出土する土器を器種別に分け，その個体数の構成比率を算出し，小地域ごとに比較検討を行うという方法を用いる。

ところで，住居跡や墓地，祭祀遺構など遺構の性格によって構成比率に差が生じることが考えられる。しかし，住居で用いられた土器量の方が墓地などと比べても圧倒的に多いと考えられ，また住居での器種組成の方が日常生活との関わりが深いと考えられることから，本論では住居跡を中心とした集落遺跡関係の遺構に限定したい。

なお，南部九州の住居跡の場合，床面出土の遺物は稀であり，ほとんどが床面から浮いた状態で出土する。このような資料の場合，ある程度時間幅を持ってしまうことから，本論では一様式内でとらえられる資料が得られた住居跡を対象とした。

土器の個体数の算出方法は，各遺跡の報告書の掲載資料を用いて各器種の破片数を数え，それを個体数とした。

1：成岡　2：辻堂原　3：入来　4：村原(栫ノ原)
5：上加世田　6：釘田(第１地点)　7：野畑　8：下大原
9：小六郎　10：尾長谷迫　11：宮ノ前　12：平松原
13：萩原　14：保養院　15：東原　16：妻山元　17：東田
18：花牟礼(大戸原)　19：永野原　20：後田山下　21：妙見
22：上田代　23：水落　24：山ノ田第１　25：蓑原
26：アンモン山　27：夏女　28：沖松　29：前原北　30：後ヶ迫Ａ

第２図　分析対象遺跡分布図

3　各地域の様相

（１）川内平野周辺（第３図）

この地域は良好な遺跡が少なく，成岡遺跡のみとなった。また時期も辻堂原期と笹貫期に限られ，しかも笹貫期では対象となる資料が１つとなった。

器種組成は，辻堂原期では甕・壺・鉢・高杯を中心に坩が加わり，笹貫期も同様である。杯は辻堂原期に認められる。一方，杯は笹貫期に認められないが，それは対象資料が１つだけということも理由と考えられる。

（２）薩摩半島西岸域（第４図）

この地域の遺跡は上加世田遺跡・村原（栫ノ原）遺跡・

入来遺跡・辻堂原遺跡が挙げられ，全時期を通して資料がみられるが，辻堂原遺跡がその大半を占めている。

器種組成は，中津野期と東原期では甕・壺を中心に，鉢・高杯・坩が加わる。辻堂原期と笹貫期では全器種一様に認められる。なお，杯は笹貫期に若干認められる。

（3）薩摩半島東岸域（第５図）

この地域の遺跡は釘田遺跡第１地点・野畑遺跡・下大原遺跡・小六郎遺跡・宮ノ前遺跡・尾長谷迫遺跡が挙げられるが，時期としては東原期と笹貫期だけとなった。

器種組成は，東原期では甕・壺を中心に、鉢・高杯・坩が加わる。笹貫期では甕・壺・高杯を中心に，鉢・坩が加わるが，杯は認められない。

（4）鹿児島湾奥周辺（第６図）

この地域の遺跡は萩原遺跡・平松原遺跡・東原遺跡・保養院遺跡・妻山元遺跡が挙げられ，全時期を通して資料がみられる。

器種組成は，中津野期から辻堂原期においては甕・壺・高杯を中心に，鉢・坩が加わるが，笹貫期では甕・高杯が中心となる。杯は笹貫期にごくわずか認められる。

（5）肝属平野周辺（第７図）

この地域の遺跡は後田山下遺跡・永野原遺跡・東田遺跡・花牟礼遺跡が挙げられるが，時期は笹貫期が中心となり，中津野期は１資料，辻堂原期は２資料となった。

器種組成は，中津野期は甕・鉢がみられ，辻堂原期では甕・鉢・高杯が中心である。笹貫期では甕・高杯が中心となる。杯は辻堂原・笹貫両期に認められ，また須恵器模倣杯も存在する。

（6）加久藤・小林盆地周辺（第８図）

この地域は近年調査事例が増加しているため対象となる遺跡が多いが，今回は水落遺跡・妙見遺跡・上田代遺跡の３遺跡を対象とした。全時期を通して資料がみられるが，東原期は１資料のみとなった。

器種組成は，中津野期と東原期は甕・壺を主体に，鉢・高杯が加わる。辻堂原期では甕と高杯を中心に，杯が加わる。笹貫期では杯が甕・高杯と並んで器種組成の中心となり，須恵器も比較的安定した存在となる。また須恵器模倣杯も認められる。

（7）都城盆地周辺（第９図）

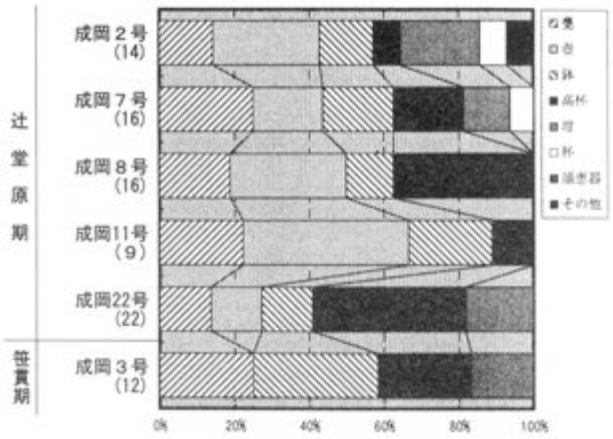
この地域は山ノ田第１遺跡と簑原遺跡しか挙げられず，また辻堂原・笹貫両期は１資料ずつとなった。

器種組成は，中津野期では甕・壺・鉢・高杯が中心であり，東原期では甕・壺・高杯が中心となる。辻堂原期に杯が認められ，笹貫期も同様である。

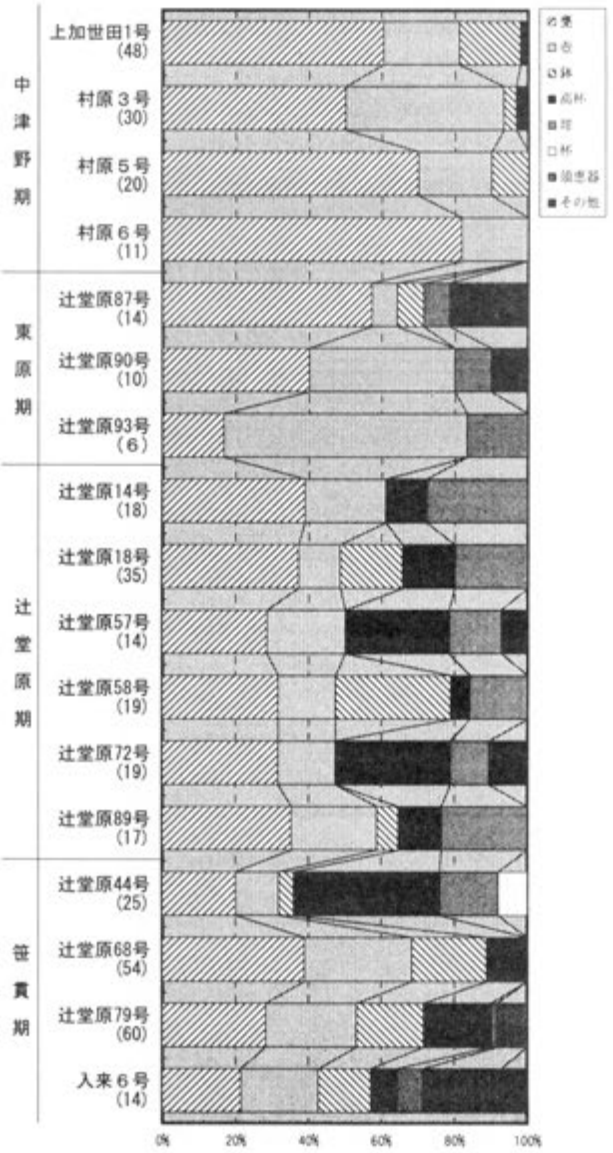
（8）小結

以上，小地域毎に器種組成の様相を見てきたが，ここでは時期毎にその様相を見てみる。

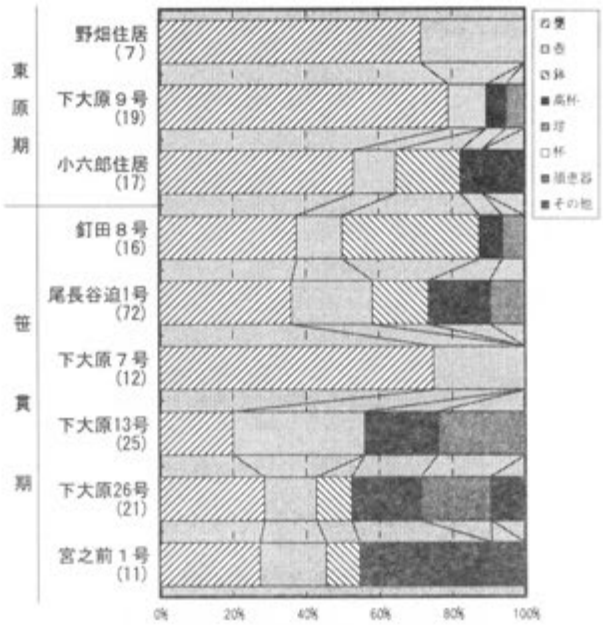
中津野期から東原期にかけては，どの地域も甕・壺・鉢を中心として，高杯・坩などが加わるという器種組成



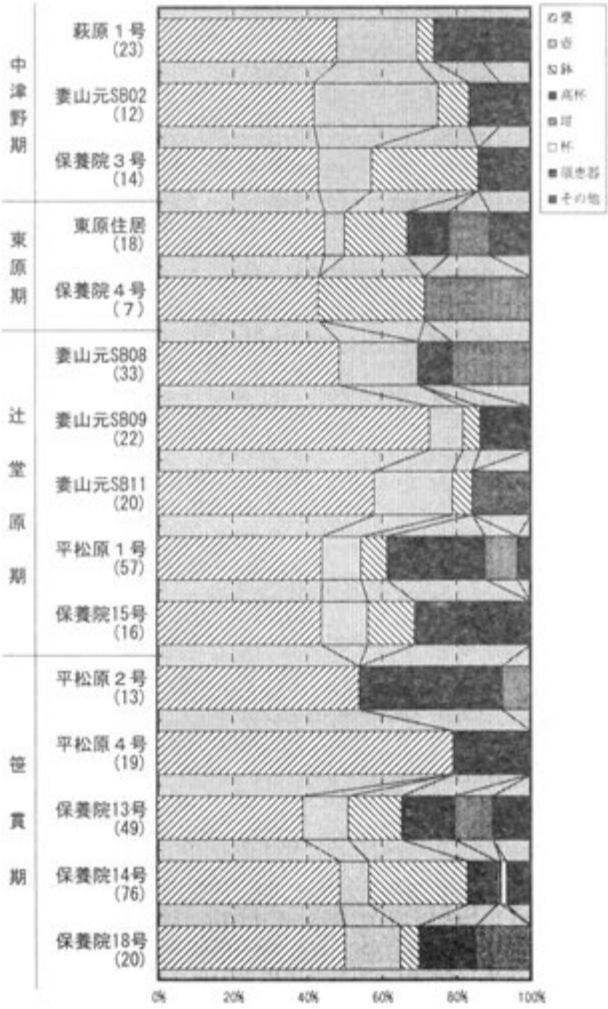
第３図　器種組成表（川内平野周辺）



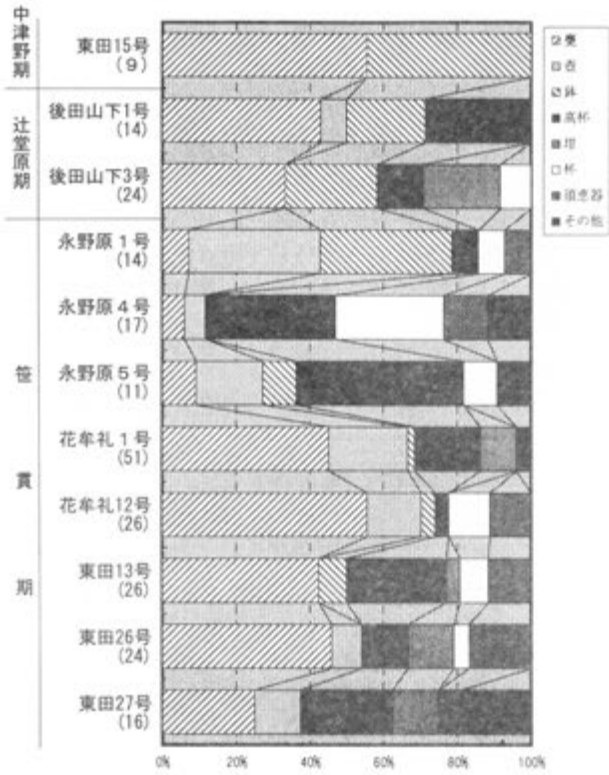
第４図　器種組成表（薩摩半島西岸域）



第５図　器種組成表（薩摩半島東岸域）



第６図　器種組成表（鹿児島湾奥周辺）



第７図　器種組成表（肝属平野周辺）

がほとんどであり，南部九州一様である。

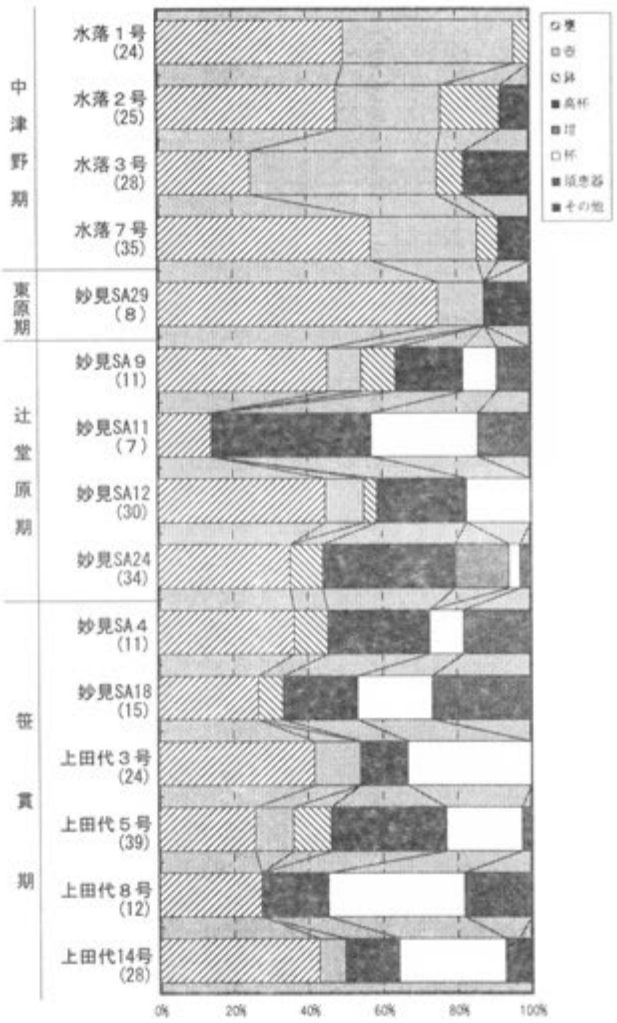
しかし，辻堂原期になるとその様相が崩れてくる。それは川内平野周辺や肝属平野周辺，都城盆地周辺，加久藤・小林盆地周辺では器種組成に杯が加わるのに対して，他地域では杯は認められないというものである。そして笹貫期においては，肝属平野周辺や加久藤・小林盆地周辺では杯の比率が高くなり，また薩摩半島西岸域や鹿児島湾奥周辺でもごくわずかながら存在するが，薩摩半島東岸域では辻堂原期同様認められない。

このように，器種組成の変化には南部九州において地域差が存在することが分かり，中村の見解を追認することとなった。また変化が認められる地域の中でも，川内平野周辺や肝属平野周辺，都城盆地周辺，加久藤・小林盆地周辺は辻堂原期に，薩摩半島西岸域や鹿児島湾奥周辺は笹貫期に変化が認められるというように，時期差も存在することが分かった。

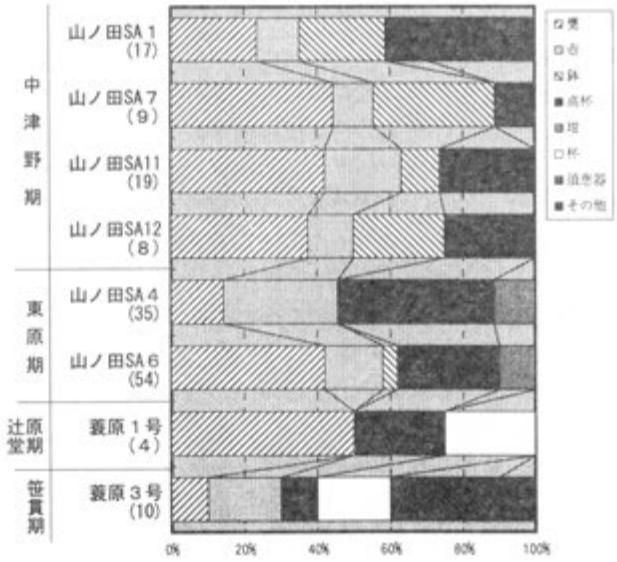
特に，地理的に宮崎平野に近い肝属平野周辺や都城盆地周辺，加久藤・小林盆地周辺，そして中九州に近い川内平野周辺から先に変化が認められるという点には注目できる。

4　他地域における器種組成の様相

ここでは，南部九州に隣接する人吉盆地周辺と宮崎平野の器種組成の様相をそれぞれ概観し，南部九州の様相と比較検討したい。



第８図　器種組成表（加久藤・小林盆地周辺）



第９図　器種組成表（都城盆地周辺）

（１）人吉盆地周辺

人吉盆地周辺の土器編年は木崎康弘により提示されている（木崎 1997）。それは夏女Ⅰ式→夏女Ⅱ式→沖松Ⅰ式→沖松Ⅱ式→沖松Ⅲ式→「アンモン山遺跡段階土器群」というものである。この編年案を基に中村がこの地域の土器様相について述べている（中村 2000）。

中村はまず，夏女Ⅰ式を１期（中津野式併行），夏女Ⅱ式・沖松Ⅰ・Ⅱ式を２期（東原式併行），沖松Ⅲ式・沖松15 号住居跡出土遺物を３期（辻堂原式併行），アンモン山遺跡出土遺物を４期（笹貫式併行）とした。そして器種組成について，１～３期は薩摩・大隈と連動するが，４期において杯主体になるとした。

そこで中村の時期区分に沿って，具体的に器種組成を見てみる（第 10 図）。１期は甕・壺・鉢・高杯・坩が一様に認められる。２・３期は鉢の比率が下がり，甕・壺・高杯・坩が中心となる。また，３期において杯が認められる。４期は杯が甕・高杯と並んで器種組成の中心となる。なお，４期について中村は杯主体の器種組成となることを指摘しているが，今回の検討ではそのような様相は認められなかった[4]。

この様相を南部九州と比較すると，３期（辻堂原式併行期）に杯が認められ，４期（笹貫式併行期）になるとその比率は高くなるが，杯主体の器種組成とならないという様相は肝属平野周辺や加久藤・小林盆地周辺と同様である。

（２）宮崎平野

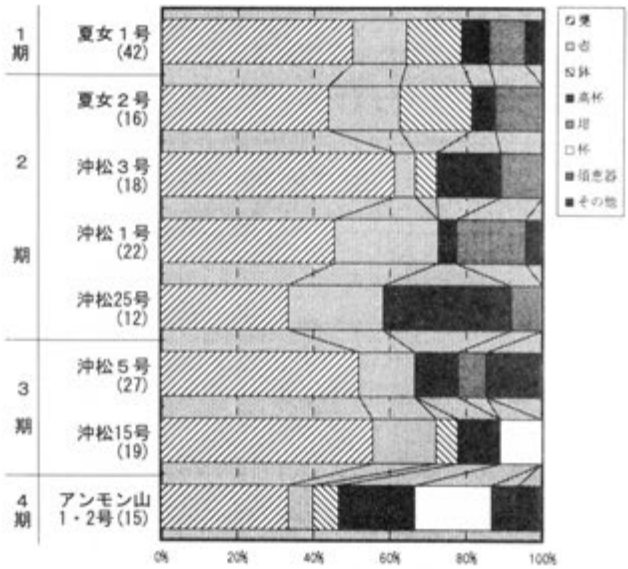
宮崎平野の器種組成については中村（中村 2000）や松永幸寿（松永 2001），今塩屋毅行・松永幸寿（今塩屋・松永 2002）が触れている。そのうち，宮崎平野の古墳時代の土師器を詳細にまとめ，１～10 期に細分した今塩屋・松永によると，第４期（ＴＫ208～23 型式併行）に須恵器や杯がみられるようになり，第５期（ＴＫ47～ＭＴ15 型式併行）では杯の出土量が増加するとしている。

また，中村もＭＴ15～ＴＫ209 型式併行期において，杯主体となり，高杯が減少するという器種組成における大きな変化があるとしている。

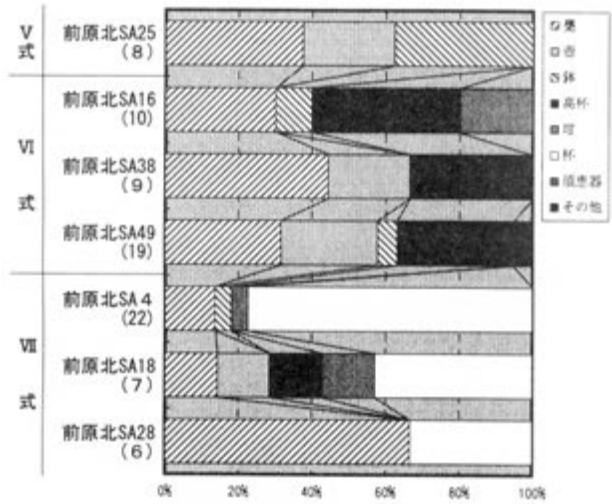
ところで，上述したように宮崎平野における土師器編年は今塩屋・松永により提示されている。器種組成の分析を行う場合，本来ならばその編年案を基に宮崎平野全体の遺跡を対象とすべきであろう。しかし，宮崎平野の土師器を十分に理解できていない筆者には恥ずかしながらそのような力量はなく，そして時間的余裕もない。

そこで，土師器の良好な一括資料が得られ，それに基づき，北郷泰道により編年がなされている前原北遺跡の資料（宮崎県教育委員会 1988）を用いることとしたい。

北郷は報告書の中で，前原北遺跡の資料を前原北Ⅰ～Ⅶ式に編年しており，Ⅴ式を弥生時代終末期に位置づけ，Ⅵ式を４世紀後半～５世紀前半，Ⅶ式を５世紀後半～６



第10図　器種組成表（人吉盆地周辺）

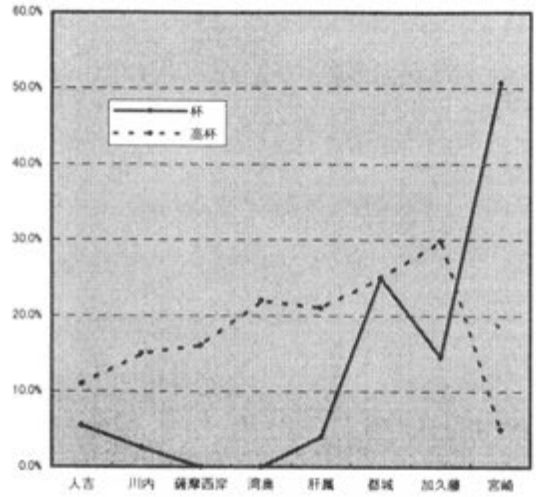


第11図　器種組成表（宮崎平野）

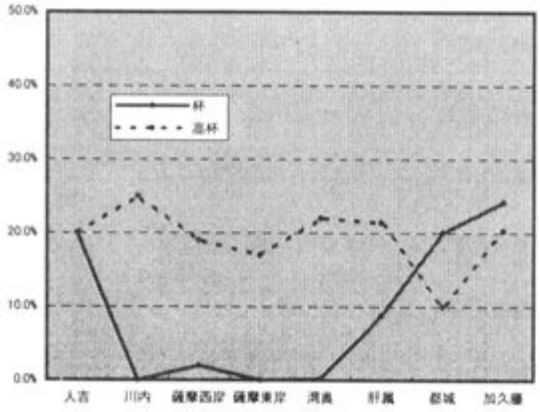
世紀前半とした（北郷 1988）。この年代観から，大まかではあるが，南部九州との併行関係を見ると，V式は中津野式と，VI式は東原式と，VII式は辻堂原～笹貫式の一部と併行関係にあると思われる。

器種組成について見てみると（第11図），V式では甕・壺・鉢が中心であるが，VI式では甕・壺・高杯が中心となり，鉢の比率が減少する。VII式になると甕・杯が中心となり，鉢・高杯はほとんど見られなくなる。つまり，VII式において汎日本的な器種組成となることが分かる。

この様相を南部九州と比較すると，VII式（辻堂原期）に杯が認められるという点では，川内平野周辺や肝属平野周辺，都城盆地周辺，加久藤・小林盆地周辺と同じであるが，出現当初から器種組成の主体を占めるという点では異なる。



辻堂原期



笹貫期

第12図　各地域における杯と高杯の比率

5　まとめ

「成川式土器」の器種組成の変化を杯の様相に着目して検討した。その結果，杯が辻堂原期に川内平野周辺や肝属平野周辺，都城盆地周辺，加久藤・小林盆地周辺において存在し始め，笹貫期になると薩摩半島西岸域や鹿児島湾奥周辺でもわずかに存在するようになる一方，薩摩半島東岸域では認められないという現象がみられることが分かった。つまり，南部九州内では器種組成の変化に地域差と時期差が存在することが明らかとなった。

また辻堂原・笹貫両期の各地域における高杯と杯の比率の平均をそれぞれ算出した（第12図）。この結果から，辻堂原期（前原北VII式）において杯の比率が宮崎平野では高く，人吉盆地周辺や川内平野周辺，肝属平野周辺，都城盆地周辺，加久藤・小林盆地周辺では杯の比率は低いことが看取される。また今回は検討できなかったが，熊本平野も古墳時代中期以降は汎日本的な器種組成となり，杯の比率が高いと考えられる。

つまり，杯の比率には南部九州と隣接する地域が高く，そこから離れると，その比率が下がるという地理的勾配がみられる。また，笹貫期も同様であろう[5]。

また人吉盆地周辺や肝属平野周辺，加久藤・小林盆地周辺では笹貫期になると，杯の比率が増加する様相がみられる。このことから，杯という新しい器種は徐々に受容されていったと考えられる。

ところが，人吉盆地周辺や川内平野周辺，肝属平野周辺，都城盆地周辺，加久藤・小林盆地周辺は宮崎平野（おそらく熊本平野も）でみられるような杯主体の汎日本的な器種組成とはなっておらず，「杯はある程度存在するものの，高杯が高い比率で存在する」という独特な器種組成である。同時期において高杯の比率が高い様相を示すのは薩摩半島西・東岸域や鹿児島湾奥周辺も同様である。

つまり，南部九州の周縁域である川内平野周辺や肝属平野周辺，都城盆地周辺，加久藤・小林盆地周辺，そして人吉盆地周辺は，南部九州と南部九州に隣接する地域，つまり宮崎平野や熊本平野の両方の要素が混在した器種組成を形成していると考えられる[6]。

6　おわりに

本論では「成川式土器」の器種組成について検討を行ってきたが，問題点や課題がいくつか残った。それは土器の個体数算出時に報告書の掲載資料をそのまま用いたことや，小地域や時期毎に資料数の格差がみられてしまったことなどである。

報告書の掲載遺物は報告書作成段階で報告者による選別を受けており，出土した状態そのままの器種組成を反映していない可能性がある。従って，個体数算出時には遺構から出土した全資料を対象とすべきであろう。

また，今回は掲載された破片数をそのまま個体数としたが，この方法にも問題があり，今後は，本来の器種組成により近い数値が算出できる方法を考えなければならない。

次に小地域や時期毎に資料数の格差がみられたことについては調査の有無にも関わってくると考えられるが，最近では川内平野周辺や肝属平野周辺，都城盆地周辺において良好な資料が得られているようである。これらの成果を含めていけば，資料数が安定してくると思われる。

また時間的余裕が無かったため，熊本平野の様相を検討できなかったが，人吉盆地周辺や川内平野周辺，そして薩摩半島西岸域は熊本平野（中九州西部）との関係が深いと考えられるため，今後検討する必要があろう。

以上のような問題点・課題はあるが，今回は「成川式土器」の器種組成研究のための基礎作業として，報告書掲載資料を用いて，ある程度の見通しを得ることができたと思われる。今後機会を改めて，精緻な検討を行いたいと考えている。

「成川式土器」の編年研究は中村により基本的な編年が示され，現在はほぼ落ち着いた状態にあると言ってよい。しかし，上述したように器種組成に地域差が認められたり，形態にも地域差が認められる。従って，今後は小地域毎に編年を行う必要があり，その編年を踏まえた上で他地域（人吉盆地周辺・宮崎平野・熊本平野）との併行関係を把握し，「成川式土器」の様相やひいてはその当時の社会の様相も探っていかなければならない。

その編年作業を行う上で必要なのが，遺構内一括資料である。ところが遺物がどのような位置で出土しているのかというとても重要な記録が欠けている報告例が多い。

また，器種組成の個体算出時には出土した全資料を対象とすべきであると上述したが，全ての資料を実見するのは困難な作業である。従って，今後は一遺構内の器種組成の比率も提示することが必要ではないかと思われる。

謝辞

本論は 1997 年度鹿児島大学人文科学研究科在籍時に渡辺芳郎先生へ提出したレポートを骨子とし，最近の研究動向をふまえて加筆・訂正を行ったものである。渡辺先生にはレポートの内容について，多くのご指摘・ご指導を頂きました。また中村直子氏には機会あるごとに「成川式土器」について，桒畑光博氏には都城盆地周辺の遺跡についてそれぞれご教示を頂きました。記して感謝申し上げます。

【　註　】

1　「成川式土器」という名称は地域的広がりなど，定義があいまいなまま用いられているため、カッコ付きとした。

2　鹿児島県本土に宮崎県南部（加久藤・小林盆地周辺，都城盆地周辺，志布志湾沿岸）を含めた一帯を示す。

3　中津野式は弥生時代後期後半～庄内式併行，東原式は布留式併行，辻堂原式は布留式後半～須恵器ＴＫ47 型式併行，笹貫式はＭＴ15～ＴＫ48 型式併行である（中村 2000・2002）。

4　アンモン山１・２号住居跡出土資料は実際の出土量に比べて報告書掲載遺物が少なく，また出土状況が不明瞭であるなど問題が多く，編年を行った木崎も参考資料としての提示にとどめているように再検討の余地がある。

5　今回は包含層出土のため検討の対象とならなかったが，辻堂原～笹貫期の土器が数多く出土した垂水市後ヶ迫Ａ遺跡においてわずかではあるが杯が認められる（垂水市教委 1999）。

6　吉本正典は都城盆地周辺に関して，地理的位置を反映して，「成川式土器」との様式間距離がより近くなると指摘している（吉本 1989）。

【引用・参考文献】

池畑耕一　1980　「成川式土器の細分編年案」『鹿児島考古』14　鹿児島県考古学会

石野博信　1984　「古代住居の日常容器」『橿原考古学研究所論集』6　吉川弘文館

指宿市教育委員会　1992　『橋牟礼川遺跡Ⅲ』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（10）

今塩屋毅行・松永幸寿　2002　「日向における古墳時代中～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第５回九州前方後円墳研究会発表資料集

内山敏行　1997　「手持食器考－日本的食器使用法の成立－」『ＨＯＭＩＮＩＤＳ』１　ＣＲＡ

宇野隆夫　1992　「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』40　国立歴史民俗博物館
1999　「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新－律令制的食器様式の確立過程－」『日本考古学』7　日本考古学協会
下山覚　1992　「指宿市橋牟礼川遺跡出土の須恵器長頸壺の年代比定とその意義について」『人類史研究』8　人類史研究会
杉井健　2002　「古墳時代中期から後期の土師器研究の諸問題」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第5回九州前方後円墳研究会発表資料集
多々良友博　1981　「成川式土器の研究」『鹿児島考古』15　鹿児島県考古学会
垂水市教育委員会　1999　『後ヶ迫A遺跡』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
都出比呂志　1989 a　「土器の器種組成と消費単位」『日本農耕社会の成立過程』　岩波書店
1989 b　「竪穴式住居と消費単位」『日本農耕社会の成立過程』　岩波書店
坪根伸也　1986　「成川式土器小考－甕型土器突帯における一試論－」『鹿大史学』34　鹿児島大学史学地理学教室
2003　「南九州の集落と土器の様相」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第6回九州前方後円墳研究会発表資料集
中村直子　1987　「成川式土器再考」『鹿大考古』6　鹿児島大学考古学研究室
1993　「中津野式土器に表れる地域色」『鹿児島考古』27　鹿児島県考古学会
1999　「古墳地帯と無古墳地帯のコミュニケーション－南九州の土器をメディアとして－」『新しい関係性を求めて－コミュニケーションの諸相－』鹿児島大学教育研究学内特別経費全学プロジェクト報告書（1）
2000　「九州南部における土器様相の変化」『東北・九州地域における古墳文化の受容と変容に関する比較研究』平成9年度～11年度科学研究費補助金研究成果報告書
2002　「薩摩・大隅」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第5回九州前方後円墳研究会発表資料集
西弘海　1982　「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集　平凡社
平田信芳　1979　「隼人が用いた土器－成川式土器」『隼人文化』5　隼人文化研究会
本郷泰道　1988　「第4節 まとめ－弥生土器のⅢ期編年を中心に－」『熊野原A・B地区・前原南・前原北遺跡他』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書（4）宮崎県教育委員会
松永幸寿　2001　「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』17　宮崎考古学会
吉本正典　1989　「宮崎県の古墳時代研究史（1）」『宮崎考古』11　宮崎考古学会
1995　「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察－須恵器出現以前の資料を中心として－」『宮崎考古』14　宮崎考古学会

【検討に用いた報告書等】

姶良町教育委員会　1978　『萩原遺跡』
指宿市教育委員会　1981　『宮ノ前遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
1986　『尾長谷迫遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
えびの市教育委員会　1997　「上田代遺跡」『田代地区遺跡群 上田代・松山・竹之内遺跡　妙見原遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書(20)
鹿児島県教育委員会　1978　「東原遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
1983　「成岡遺跡」『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)
1985　『成岡遺跡Ⅱ』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(35)
1991　『平松原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(58)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　1994　『保養院遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(11)
1996　『東田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（16）
鹿児島大学法文学部　1992　「釘田第一地点（鹿児島大学教養部）遺跡発掘調査報告」『南九州地域における原始・古代文化の諸要相に関する総合的研究』
加世田市教育委員会　1977　『村原（椿ノ原）遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
1985　『上加世田遺跡-1』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
河口貞徳　1976　「入来遺跡」『鹿児島考古』11　鹿児島県考古学会
喜入町教育委員会　1985　『野畑遺跡』喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
1987　『小六郎遺跡・段ノ原遺跡』喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
1988　「下大原遺跡」『下大原・松木田・永野遺跡』喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
熊本県教育委員会　1993　『夏目遺跡』熊本県文化財調査報告(128)
1996　『沖松遺跡』熊本県文化財調査報告(154)
高山町教育委員会　1981　『花牟礼（大戸原）遺跡』高山町埋蔵文化財報告書（1）
高山町教育委員会・（財）元興寺文化財研究所　2000　『永野原遺跡』高山町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
国分市教育委員会　1985　『妻山元遺跡』国分市埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
小林市教育委員会　1992　『水落遺跡』小林市埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
中村耕治　1997　「高山町内の古墳時代遺跡」『高山郷土誌』高山町
人吉市教育委員会　1985　『アンモン山遺跡』
吹上町教育委員会　1977　『辻堂原遺跡』
宮崎県教育委員会　1988　「前原北遺跡」『熊野原A・B地区・前原南・前原北遺跡他』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書（4）
1944　「妙見遺跡」『野久首・平原・妙見遺跡』九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
1996　『山ノ田第1遺跡』
宮崎県埋蔵文化財センター　2001　『梅北佐土原・中尾・簑原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（42）